

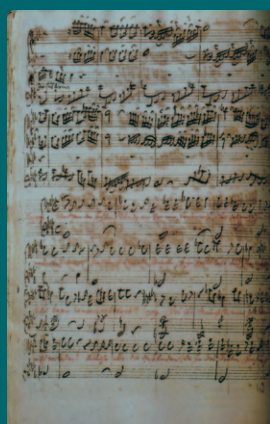
J.S.BACH 第24回宝塚混声合唱団音楽会

Matthäus-Passion

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

「マタイ受難曲」

BWV244 字幕付き



2012年7月28日(土)

いたみホール (伊丹市立文化会館)

開場 PM2:30 開演 PM 3:00

主催:宝塚混声合唱団

後援:宝塚市・伊丹市・宝塚市教育委員会・宝塚市文化振興財団・宝塚合唱連盟

ごあいさつ

今日は私たち宝塚混声合唱団第24回音楽会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

大森先生の「マタイを演奏したいですね」というお話から、マタイへの取り組みが始まりました。

マタイ受難曲といえば、バッハの最高傑作のみならず、教会音楽の最高峰と位置づけられる作品で、演奏も2部構成、3時間に及ぶ大曲です。

マタイ福音書によるキリスト受難を題材にした作品への深い理解が必要とされました。

2群8声部の合唱は、団員の増強とともに一人ひとりのさらなる研鑽が求められました。

音楽会を企画してから今日の演奏会まで、大森先生のドイツ語の発音、発声、音楽表現に至る温かい（時にはきびしい）ご指導と、5人のソリストの皆さま、アンサンブル・ムジカ・アニマの皆さま、字幕を担当していただいた藤野さま、資料を提供いただいた長尾さま、練習時にピアノを担当いただいた先生方、多くの方々のご協力を得て、今日晴れの舞台を迎えることが出来ました。

本日の演奏を通して、皆さまの心にいのちの尊さ、生きる希望をお伝えできれば、これほどの喜びはありません。

最後までごゆっくりご鑑賞いただき、今後とも宝塚混声合唱団の活動にご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2012年7月 宝塚混声合唱団



Program

J.S.BACH ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

Matthäus-Passion

マタイ受難曲 BWV244

指揮 大森 地塩

福音史家 松原 友

イエス 萩原 次己

ソプラノ 田中 希美

アルト 福島 紀子

バス 片桐 直樹

オーケストラ アンサンブル・ムジカ・アニマ

字幕 藤野 明子

導入合唱

1. 「来たれ、お前たち娘よ、わたしと共に嘆け」（合唱）

十字架の死の預言

2. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
3. コラール「最愛のイエスよ」（合唱）

祭司長の合議、イエスに香油を注ぐベタニアの女

4. レチタティーヴォ（福音史家、合唱）
5. レチタティーヴォ（アルト）
6. アリア「悔いの悲しみは」（アルト独唱）

ユダの裏切り

7. レチタティーヴォ（福音史家、ユダ）
8. アリア「血を流せ、わたしの心よ！」（ソプラノ独唱）

晩 餐

9. レチタティーヴォ（福音史家、合唱、イエス）
10. コラール「それはわたしです、わたしが償うべきなのです」（合唱）
11. レチタティーヴォ（福音史家、イエス、ユダ）
12. レチタティーヴォ（ソプラノ）
13. アリア「わたしの心をあなたに捧げます」（ソプラノ独唱）

オリーブ山

14. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
15. コラール「わたしを知ってください、わたしの見張り人よ」（合唱）
16. レチタティーヴォ（福音史家、ペトロ、イエス）
17. コラール「わたしはここに あなたのもとにおります」（合唱）

ゲッセマネの園における苦しみ

18. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
19. レチタティーヴォ（テノール）とコラール（合唱）
20. アリア「わたしがイエスのもとで目覚めておりましょう」（テノール独唱と合唱）
21. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
22. レチタティーヴォ（バス）
23. アリア「わたしは喜んで従います」（バス独唱）
24. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
25. コラール「わたしの神が望むことは、常に行われるように」（合唱）

捕 縛

26. レチタティーヴォ（福音史家、イエス、ユダ）
27. 二重唱「このようにしてわたしのイエスは今捕らえられた」（ソプラノ、アルト、合唱）
28. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）
29. コラール「おお人よ、お前の大いなる罪を泣き悲しめ」（合唱）

- | | |
|----------|---|
| | 30. アリア「ああ、わたしのイエスが連れ去られてしまいました！」（アルト独唱、合唱） |
| 大祭司の審問 | 31. レチタティーヴォ（福音史家） |
| | 32. コラール「世はわたしを欺いて」（合唱） |
| | 33. レチタティーヴォ（福音史家、証人） |
| | 34. レチタティーヴォ（テノール） |
| | 35. アリア「耐えなさい！耐えなさい！」（テノール独唱） |
| | 36. レチタティーヴォ（福音史家、大祭司）と合唱 |
| | 37. コラール「誰があなたをこのように打ったのか」（合唱） |
| ペトロの否認 | 38. レチタティーヴォ（福音史家、第1の女中、第2の女中、ペトロ）と合唱 |
| | 39. アリア「憐れんでください、わたしの神よ」（アルト独唱） |
| | 40. コラール「わたしはあなたから離れても」（合唱） |
| ユダの後悔と最期 | 41. レチタティーヴォ（福音史家、ユダ、第1と第2の祭司長）と合唱 |
| | 42. アリア「返してください、わたしのイエスを！」（バス独唱） |
| | 43. レチタティーヴォ（福音史家、ピラト） |
| | 44. コラール「あなたの行く道と」（合唱） |
| 判 決 | 45. レチタティーヴォ（福音史家、ピラト、ピラトの妻、合唱）、合唱 |
| | 46. コラール「なんと驚くべきこの刑罰！」（合唱） |
| | 47. レチタティーヴォ（福音史家、ピラト） |
| | 48. レチタティーヴォ（ソプラノ） |
| | 49. アリア「愛のためにわたしの救い主は死のうとされます」（ソプラノ独唱） |
| | 50. レチタティーヴォ（福音史家、ピラト）、合唱 |
| | 51. レチタティーヴォ（アルト） |
| | 52. アリア「わたしの頬の涙」（アルト独唱） |
| | 53. レチタティーヴォ（福音史家）、合唱 |
| | 54. コラール「おお、血と傷だらけの頭」（合唱） |
| 十字架の道 | 55. レチタティーヴォ（福音史家） |
| | 56. レチタティーヴォ（バス） |
| | 57. アリア「来てください、甘き十字架」（バス独唱） |
| 十字架上のイエス | 58. レチタティーヴォ（福音史家）、合唱 |
| | 59. レチタティーヴォ（アルト） |
| | 60. アリア「見よ、イエスはわれらを」（アルト独唱と合唱） |
| イエスの死と埋葬 | 61. レチタティーヴォ（福音史家、イエス）、合唱 |
| | 62. コラール「いつかわたしが別れるべきとき」（合唱） |
| | 63. レチタティーヴォ（福音史家）、合唱 |
| | 64. レチタティーヴォ（バス） |
| | 65. アリア「わたしの心よ、自らを浄めよ」（バス独唱） |
| | 66. レチタティーヴォ（福音史家、ピラト）、合唱 |
| 信徒の祈り・終曲 | 67. レチタティーヴォ（バス、アルト、ソプラノ、合唱） |
| | 68. 合唱「わたしたちは涙を流してひざまずき」 |

「マタイ受難曲」解説

1. 作曲者バッハとその時代

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、1685年、神聖ローマ帝国時代のドイツ中部チューリッゲンの町、ルター派プロテスタントの精神が息づくアイゼナハに生まれました。この時代、バッハ家はすでに大音楽家一族であり、彼自身は周囲に職業として音楽に携わる人々が大勢いる環境で育ちました。バッハは父や兄から音楽の手ほどきを受け、寄宿舎学校を卒業した後はルター派教会のオルガニストや宮廷楽団員として生計をたて、教会音楽家として数多くの作品を生み出しました。

バッハは65年間の生涯を、リューネブルク、ミュールハウゼン、ワイマール、ケーテン、ライプチヒといくつもの町で過ごしています。マタイ受難曲を作曲したライプチヒでは、聖トーマス教会つきのカントル（音楽監督）として年間の礼拝時の音楽を構成、作曲し、聖歌隊や器楽演奏の指導にあたりました。このライプチヒでは教会歴1年分のカンタータを3年度分作曲するという多忙な日々を送りました。

2. マタイ受難曲

受難曲は12世紀、登場人物の役割分担をした聖職者たちが、聖書の受難記事をグレゴリオ聖歌風に朗唱するものとして始まったとされます。長い歴史の中でその形態も変化していきますが、17世紀にはコラールやアリアを挿入する変化に富んだ形式のものが現れました。バッハの作曲したヨハネ、マタイ、マルコの3つの受難曲は、イエス・キリストの捕縛から十字架にかけられるまでを、聖句（聖書の記述）を用いて描いたオラトリオです。

——1) 初演

ヨハネ受難曲を作曲してから3年、バッハ42才の1727年の聖金曜日（イエス・キリストが十字架上で息絶えたとされる復活祭前の金曜日）に、ライプチヒにある聖トーマス教会でマタイ受難曲が初演されました。歌詞はマタイ福音書26章、27章のイエスの受難の記事を骨格としていますが、自由詩の歌詞作成はピカンダーによります。

感情豊かな表現と変化に富むメロディの中に、ところどころに同じ旋律が配置されているこのすばらしい大曲に圧倒される私たちですが、実はマタイ受難曲が評価されるようになったのは、100年後の1829年、メンデルスゾーンによる再演まで待たなくてはなりませんでした。

——2) 構成

第一部29曲は、イエスが計略により引き渡されることを弟子たちに伝えるところから逮捕されるまで、第二部39曲は、裁判を受け十字架にかけられて墓に葬られるまでの内容が歌われます。曲の形態は、聖句楽曲が28曲、コラールが13曲、アリアと器楽伴奏付レチタティーヴォ（叙唱）25曲による全68曲による構成です。

バッハ研究者の磯山氏は、マタイ受難曲はテノールが歌うエヴァンゲリスト（福音史家）の聖書のことばのあとに、アリアで「私」の思いと祈り、合唱で「私たち」の考えや応答が続く「三層構成」によって進められると述べています。

——3) 合唱

マタイ受難曲は合唱で始まり合唱で終わります。第1曲は受難を目撃したシオンの娘たちが「私たちの罪のために十字架に架けられたあの方を見よ」と歌い、その報告を信じる者が「誰を？どこを？」と問いながら、これから始まる受難の結末について歌います。ここで述べられた受難の結末へ、どのような道程をたどって至るのか、それを考えさせるようにこの大合唱曲によって受難曲が始まります。

ソロによる聖句楽曲のあとに続くそれぞれの合唱は、聖句に述べられている内容に対する群衆の問いかけや思いを歌っています。合唱部分は、四声部または八声部の二重合唱で歌わ

れますが、第58曲で群衆がイエスの言葉として Ich bin Gottes Son（私は神の子である）と歌うときには全声部がユニゾンになります。

マタイ受難曲の中には13のコラールがありますが、「コラール」はもともとルター派教会で全会衆がドイツ語で歌う讃美歌をさしました。礼拝に参加する一般会衆が歌えるには、旋律は単純で歌詞もラテン語ではない民族の母国語であり、歌うことが容易でなくてはなりません。バッハは既存のコラール旋律を、マタイ受難曲の中で使用しました。第15、17、44、54、62曲には、ハスラー作曲による同じ旋律が多少の変奏を伴って使われており、中でも第54曲は讃美歌（旧）136番「血潮したたる」、カトリック聖歌集171番「いばらのかむり」として現代でも聖金曜日に歌われているものです。

マタイ受難曲の第二部は、捕らえられ連れ去られたイエスを探しに行こうというアリアと合唱から始まります。ペトロの3度の否認（第38曲）、「十字架につけろ」と叫ぶ民衆（第45曲、第50曲）、イエスの死に際し「エリヤが救いにくるか見ていよう」（第61曲）と続きますが、イエスが息を引き取った時に起こった地震や様々なできごとを見て恐れた群衆が、「本当にこの人は神の子だった」と歌う第63曲は、特に美しい合唱として知られています。最後は第67曲と第68曲です。第67曲ではバス、テノール、アルト、ソプラノのそれぞれのソロに対して、合唱がMein Jesu, gute Nacht！（私のイエスよ、お休みなさい）と歌い、第68曲ではWir setzen uns mit Tränen nieder（私たちは涙を流してひざまずき）中略 Ruhe sanfte, sanfte ruh！（安らかにお休み下さい）と、イエスを信じる人々が歌いあげて終わります。

——4) ソロ・オーケストラ演奏

エヴァンゲリストが聖句を歌うなか、イエス、ユダ、ピラト、証人、ペトロなどの人物が登場します。エヴァンゲリストに続いてイエスが発言する時にのみ、弦楽器の長い和音の伴奏（通奏低音）が入りますが、この通奏低音は、キリスト教美術によく見られる後光を音楽的に表現したものとされています。

第二部第47曲では、ピラトが判決を下したあと「いったい彼はどんな悪事を働いたのか」と自問します。これに続く第49曲のソプラノアリアでは「愛のために私の救い主は死のうとされます。罪ひとつお知りになりませんのに。永遠の滅びと裁きの刑罰から私の魂を守るために」と、天上からの声かと思えるようなメロディをゆったりと気高く歌います。

ソリストとオーケストラの皆様の演奏があつてこそ、重厚なマタイ受難曲が完成していきます。ソロパート、オーケストラ演奏もどうぞお楽しみください。

3. 宝塚混声合唱団のマタイ受難曲への取り組み

私たちは「エリヤ（メンデルスゾーン）」「カンタータ（バッハ）」「レクイエム（ラインベルガー）」と何年もドイツ語での合唱を経験してきたはずなのですが、今回も子音の正確で明確な発音とウムラウト母音について、何度もご指導いただきました。発声と発音に注意しながら歌詞の意味を考え、互いにパートを聞きあつて声量を調節して…と、同時にいくつものことに気を配って、バッハの時代の聖歌隊のように歌いあげることができたなら…。大森先生には、1999年のドイツ演奏旅行において、マタイ受難曲が初演された聖トーマス教会をご案内いただきました。団員の入れ替わりもありますが、宝塚混声合唱団としての歴史を思いながらマタイ受難曲を歌えることは、私たちの大きな喜びです。

バッハ「マタイ受難曲」へのオマージュ

—古い記憶から—

テナー 福田 伸

昨年秋の宝塚市民合唱祭（ベガホール）で「マタイ受難曲」の終曲を歌ったとき、なにか胸にこみあげてくるものがあり、思案するうちに、この場面にどこかで出会ったような気がし、帰宅して心当たりの古いメモ帳を調べていると、“昭和32年4月イギリス映画「マタイ受難曲」（カラヤン指揮）を観る。名篇なり。前編、後編あわせて3時間半。終幕近く嗚咽する。”と記しており、半世紀余りむかしの大学生の頃の、もう霧の彼方に消え去った記憶が蘇ってきました。バッハの「マタイ受難曲」全曲を、福音書のキリスト受難の場面を描いた数々の名画と重ね合わせて撮られた白黒映画で、キリスト埋葬の場面に流れる信徒たちの清澄な合唱で幕を閉じる瞬間が次第に眼前に浮かんできたのです。

それとともに、その頃、音楽ファン必読の書とされていた「夫セバスティアン・バッハの回想」（服部龍太郎訳）という本を読んでたいそう感激したことが想起されてきました。この本はバッハの後妻で13人もの子供を産んだマグダレーナ・バッハが、夫の死後、ともに歩んだ生活を回顧して綴った感動の書であり、音楽教師、大家長、慈父、そして恋人としてのバッハの頑固で誠実な人柄、偉大な作曲者としての創作の秘密などを語り明かした素敵な書物でした。マグダレーナの真作とされ、小林秀雄、河上徹太郎など当時の評論家たちも絶賛したこの本が、実はマグダレーナの著ではなく、20世紀に入ってアメリカの女流作家E・メイネルが書いた物語であるということが判明し、今日では全く顧みられなくなりましたが、先日、この本を50余年ぶりに読み返してみても、いまでも新鮮な魅力を失っていないのに改めて驚きました。本の中で「マタイ受難曲」に言及している箇所を抜き出してみます。

“この音楽はセバスティアンの心のいちばん奥底から出たものでした。みずから悩み、被造物の罪をみずから感ずることなくしては、とうていキリストの創傷と十字架上の死を想像できませんので、彼はそれをはげしい苦悩のうちに書きました。この音楽は1729年*の復活祭の前週に初めて演奏されましたが、それはまことに偉大過ぎて、初めて聞いた時には真髓が理解されませんでした。この曲を閉じる合唱曲はセバスティアンの天分が成しとげた偉大な作品の中でも特にすばらしいものです。”

バッハの死後「マタイ受難曲」はほとんど演奏されることもなく長い間埋もれていましたが、初演の年から100年を経た1829年に、20歳のF. メンデルスゾーンがベルリンで指揮して再演し、それが今日のバッハ全作品の“蘇り”と評価のきっかけになったのは広く知られているところです。

バッハといえば、近年はG. グールドや高橋悠治などヴィルトゥオーゾのピアノ演奏を枕頭の音楽としてCDで聴くだけでしたが、いつも「古さ」のなかに時代を越えようとする「新しさ」を感じ、魅せられてきました。一昔前に私淑した松田智雄が名著「音楽と市民革命」のなかで“バッハのあの卓越した音楽性は、歴史に対する整合性から出発し、これを担って進歩へと牽引するひとつの動力となりえた”と述べ、マタイの終曲については“その憧れにみちた美しい挽歌は、神の力を讃美する。これこそは終わりであるが、また新しい始まりを宣言するのである。”と語っております。今回、はからずも、大バッハ畢生の大作「マタイ」全曲にチャレンジできる機会を得たのはおおきな喜びです。本番を歌い終えるまで、声帯が感涙にむせて絶句することがないよう心がけたいと思います。

注*：最近の学説では1727年とされている